

バルザックにおける「愚かさ」の問題

『ゴリオ爺さん』から『現代史の裏面』へ

東 辰之介

「愚かさ」をめぐる言説

マルブランシュをはじめとする十七世紀フランス哲学の研究者ミシェル・アダンは、『愚かさについての試論』（初版 1975）において、フランス文学、ギリシア・ローマの古典、及びドイツ哲学などヨーロッパ全体の文化的蓄積を利用しつつ、「愚かさ」とは何かという難題に答えようとしている¹。ここでその内容の詳細に立ち入る余裕はないが、ミシェル・アダンの導きによってわれわれが得られる興味深い発見の一つは、この「愚かさ」というテーマが、哲学の分野ではごく近年まで断片的な言及の対象にしかならなかったという事実である。ミシェル・アダンによれば、オルテガ・イ・ガセットが『大衆の反逆』（1930）の中でこのテーマに関する専門的な研究の不在を嘆いて以来、バシュラール、ドゥルーズらによって若干の考察がなされたものの、まとまった論考は出されておらず、彼の『愚かさについての試論』こそがそうした試みの嚆矢になるのではないかということだ²。確かに、1975年当時身を置いてみると、「愚かさ」についての哲学的考察をしようと思えば今では必読の先行研究になるであろう、ムージルの『愚かさについて』（1937）の仏

¹ 本書は最近ポケット版で再刊された。Michel Adam, *Essai sur la bêtise, édition augmentée*, La Table Ronde, 2004。本書の序論においてミシェル・アダンは、「愚かさ（bêtise）」の領域をフランス語の語彙のレベルで限定しようと努め、「naïveté», « niaiserie », « ridicule », « stupidité », « sottise », « imbécile » などの語について、微妙なニュアンスの違いを説明しているが、その後の論の展開においては、あまり語彙にとらわれない自由な考察を行なっている。本稿においては、「愚かさ」を「知能の働きが鈍い様子」と理解したうえで論を進めていく。

² *Ibid.*, p. 5. を参照のこと。オルテガ・イ・ガセットはこう書いている。「わたしは今までに何度も次のような疑問を抱いたことがある。つまり、隣人の愚かさに接したり衝突したりすることは、多くの人間にとって彼の人生における最大の苦痛の一つであることは昔から変わらないはずであるのに、わたしの知るかぎりでは、「愚かさに関する研究」が一つも書かれていないのはいったいどうしたことなのであろうか。』『大衆の反逆』、神古敬三訳、ちくま学芸文庫、2003年、p. 108。

訳はまだ出ていなかったようであるし³、オルテガ・イ・ガセットの一文をエピグラフに掲げたホルスト・ガイヤーの『馬鹿について』(1954)は、資料やエピソードのコレクションといった様相を呈していて、「愚かさ」についての哲学的な思索にまでは高められていないように思われる⁴。したがって、オルテガ・イ・ガセットとミシェル・アダンを信頼するならば、「愚かさ」についての哲学的な思索は二十世紀になってようやく本格化したものと考えることができるであろう。

しかしながら、文学の領域に眼を転じてみると、ミシェル・アダンの著書における大量の引用からも明らかのように、「愚かさ」のテーマはほとんど恒常的に存在していたと言ってよい。話をフランス文学に限ってみても、モンテーニュ、ラ・ブリュイエールらモラリストの系譜において「愚かさ」は直感的、経験的に理解された上で道徳的判断や風刺的描写の対象となっている⁵、モリエールは単なる風刺を超えて、賢者と「愚か者」の二項対立をゆさぶるような思考にまで踏み込んでいる⁶。また『告白』のルソーは、社交的な会話における自分の無能力との関係において「愚かさ」についての独自の考察を展開している⁷。そして何より『ブヴァールとペキュシェ』のフロベールがいる。フロベールは行動的で現実的なブルジョワ階級が社会の中心を占めていった十九世紀フランスにあって、社会が「愚かさ」に飲み込まれてゆくような感覚を覚え⁸、そこに見られる「愚かさ」の目録の一覧表を提出した。

³ 最近単行本も出版された。Robert Musil, *De la bêtise*, tr. Philippe Jaccottet, Allia, « Petite Collection », 2000.

⁴ ドイツの精神医学者である著者がその専門知識を生かし、またエラスムスの『痴愚神礼讃』のスタイルに想を得て書いた本書は、出版直後に邦訳され、くり返し増刷された。『馬鹿について』、満田久敏、泰井俊三訳、創元社、初版 1958 年。筆者は 1983 年発行の第 19 刷を参照した。

⁵ モンテーニュ『エッセー』第 3 巻、第 8 章「意見をかわす技術について」、ラ・ブリュイエール『カラクテール』第 11 章 142 番など。

⁶ 以下の論考を参照されたい。千川哲生「理屈家と愚か者の対立、モリエールの『病は気から』におけるカーニヴァル」、『仏語仏文学研究』第 25 号、東京大学仏語仏文学研究会、2002 年。

⁷ 比較文学者のローネルがこの問題を扱っている。Avital Ronell, *Stupidity*, University of Illinois Presse, Urbana and Chicago, 2002, p. 47-53.

⁸ 「おお、フランスよ！はつきり認めましょう、われわれの国ではありますが、フランスは悲しい国です！この国を覆いつくす愚劣の高波に、この国をかき消していく白痴化の洪水に、私も飲み込まれていくようです。ノアの時代の人々が、ぐんぐん高まってくる海を見て抱いた恐怖心を、いまこそ私は感じているのです」Gustave Flaubert, *Correspondance*, édition de Jean Bruneau, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t. IV, 1998, p. 814. (1874 年 6 月 17 日、ロジェ・デ・ジュネット夫人宛)

同時代のボードレールやゾラも、「愚かさ」に対する軽蔑や憎悪を表明することを忘れていない⁹。こうした作家たちの作品を少し読み返すだけでも、フランス文学がさまざまな位相において「愚かさ」に関する観察と思索を重ねてきたことは明らかであろう。文学による観察の集積が概念的な分析作業に先行するという知の一般的な歩みを、「愚かさ」についての言説もたどっていることになる。

「平凡あるいは卑俗な魂」を描く作家

それでは、フロベールよりも一世代前の作家であるバルザックにおいて、「愚かさ」のテーマは一体どのような位置を占めているのであろうか。この問いに対して、まず文学史の観点から考えられる解答を二つ与えておきたい。

一つは、モラリスト的な風刺の方向性（作家の価値判断が直接的に表明される）と、フロベール的なある種の模写の方向性（作者の意見がテキストから排除される）の双方が、バルザックの作品には並存しているということだ。

例えば、『平役人』の次のような一節は、直接的な風刺に満ちている。

脂肪太りしたお人好しで、簿記にはきわめて明るいが、それ以外のことについては何も知らず、ゼロのように丸々として、こんにちとはいう挨拶のように単純であった。[...] 職場ではサイヤール氏が馬鹿であることを誰も疑わなかったが、その馬鹿さ加減がどこまでいくのかは誰にもわからなかった。彼の愚かさはあまりにぎっしり詰まっていて、取り調べのしようもなかったのだ。それはたたいても中が空のような音は出さなかったし、すべてを飲み込むばかりで何も返してよこさなかった¹⁰。

⁹ 「意地悪であることは決して許されることではない。しかし、自分が意地悪であると分かっていることには、何らかの美点がある。悪徳の中でも最も救いようがないのは、愚劣さによって悪をなすことである。」 Charles Baudelaire, « La Fausse Monnaie », *Le Spleen de Paris*, introduction, notes, bibliographie et chronologie par David Scott, Flammarion, 1987, p. 137. 「私は無力で役立たずな人間を憎む。彼らは私を不快にする。彼らは私の血をたぎらせ、私の神経を破壊してしまった。[...] 三人の愚か者にぶつかることなしには、世間を二歩と進めない。だから私は陰鬱なのだ。大通りは連中であらう。群をなしている間抜けたちは、通りがかりにあなたを捕まえて、あなたの顔に彼らの凡庸さを吐きつける。彼らは歩き、しゃべるのだが、身ぶりといい声といい彼らのすべてが私を傷つけるので、スタンダールと同じく、馬鹿より極悪人のほうがましだと思うくらいだ。」 Émile Zola, *Œuvres complètes*, publiées sous la direction de Henri Mitterand, Nouveau Monde, t. I, 2002, p. 723.

¹⁰ *Les Employés, La Comédie humaine*, nouvelle édition publiée sous la direction de

ここで「愚かさ」は、自己の限られた知識に満足し、何らの反省の契機も持たず、外部との精神的な交流が不可能な状態に陥っている状態としてとらえられ、痛烈に揶揄の対象となっている。バルザックは、「愚かさ」を外部から観察し、それに対して価値判断を下すというモラリスト的なポーズをここで打ち出していると言えるだろう。

これに対し、『セザール・ピロトー』の次のような箇所は、ジュリエット・フルーリッシュが指摘しているように¹¹、フロベールの『紋切型辞典』のスタイルを一部先取りしている。

必然的に彼（ピロトー）は、モリエール、ヴォルテール、ルソーを人の話をうのみにしてほめちぎり、読みもしないのにその作品を買うようなバリのブルジョワの言葉遣い、間違い、意見をそのまま自分のものにするものとなった。そのブルジョワたちの主張によれば、衣装だんすはオルモワールと言わなければならない、なぜなら女性たちは彼女の金と昔はたいてい波型模様の織物で作ったドレスをこの家具の中にしてしまっておいたからだ、それを間違えてアルモワールと言っているのだ、ということになる。ポチエ、タルマ、マルス嬢は百万長者の十倍も金持ちであって、ほかの人間たちのように生活していない、大悲劇役者のタルマは生肉を食い、マルス嬢はある有名なエジプトの女優をまねて、時おり真珠をホワイトソースで煮込むのである。ナポレオン皇帝はタバコをふんだんに取り出せるようにチョコッキに皮のポケットをつけており、またヴェルサイユのオレンジ園の階段を馬に乗って全速力で駆け上る。作家や芸術家などは奇行をくり返した挙句、施療院で死ぬ。それに彼らはみな無神論者だから、彼らを自分の家に迎えないよう気をつけなければならない¹²。

フロベールは「愚劣とは確固不動たる何ものかで、どんな攻撃もこれに突き当たると壊れてしまいます。それは花崗岩の性質を持っていて、堅くて、抵抗するのです¹³」と書簡に記しているが、外部からどんなに批判されようとも意に介することのない（あるいは気づかない）そうした「愚かさ」に対して彼は、その内側に入り込むようにして表現するという作戦をとった¹⁴。

Pierre-Georges Castex, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1976-1981, 12 vol.(以後 CHと表記), t. VII, p. 931.

¹¹ Juliette Friösch, « L'effet Birotteau : grandeur et décadence », *L'Année balzacienne* 1990, p. 389-402.

¹² César Birotteau, CH, t. VI, p. 69.

¹³ Gustave Flaubert, *op. cit.*, t. I, 1973, p. 689. (1850年10月6日、叔父宛)

¹⁴ 「ブヴァールとペキュシェが完全に私を満たし、私は彼らになってしまいました！彼らの愚劣は私のもの、もう参ってしまいます。」 *Ibid.*, t. IV, 1998, p. 920. (1875年4月15日頃、ロジェ・デ・ジュネット夫人宛)

この方法は、そもそも「愚かさ」の問題に内在している「他者」の問題、すなわち「愚かである」という判断は常に「他者」に向けられるものであって¹⁵、そうである以上、自分もまた「他者」から見たら愚かであるのかもしれないという不安に満ちた構造を、表面上断ち切る効果を持っている。つまりこの方法は、オリジナルが確固として存在しないものに対するパロディーの実践により、「愚かさ」を前もって自壊の道に引き込んでおくことで、誰もがそのオリジナルとなることを密かに避けたくなるような仕掛けを生み出したのだ。『セザール・ピロトー』の上記の一節も、述べられている内容がパリのブルジョワの意見であるという文法上の保証が途中から失われ(あるいは潜伏し)、語り手の地の文と見分けがつかなくなるような書き方がなされている。ここでバルザックは、フロベールと同じように「愚かさ」の内側に入り込んでそれを描き出すという方法を用いていると言えよう。

以上の例から、バルザックにおいて「愚かさ」がしばしば問題となり、その扱い方、記述法がフランス文学の共通財産に属するものであることをひとまず見て取れたところで、文学史の立場から得られるもう一つの知見を確認しておきたい。それは、十九世紀前半の文学状況におけるバルザックの独自性に関わってくる。ランソンの『フランス文学史』から引用する。

なぜバルザックが現代リアリズムの父とみなされたのか、理解するのはたやすい。彼は並外れてロマンチックだった。しかし芸術的センス、詩的才能、文体を欠いていたために、ロマン派的な靈感によって書かれた小説と場面とはいつも彼の作品の失敗した部分であったし、今日ではまさに死んだ部分となってしまっている。反対に彼が完璧に描き出したのは、平凡あるいは卑俗な魂、ブルジョワあるいは民衆の風俗、物質的および感覚的な事柄であった。彼の気質は、わが国のリアリズム芸術がこれからずっと専心するに違いないと思われるいくつかの主題に見事に適合していたのである。したがって、バルザックはその数々の欠点とその力強さによって、小説におけるロマン主義とリアリズムの分離を行なっていたのだ。それにもかかわらず、彼の作品の中には何か並外れたもの、過剰なもの、極端なものが残っていて、そのロマンチックな起源を明かしているのである¹⁶。

¹⁵ もちろん、過去の自分に対しては、他者に対するのとはほぼ同じように「愚か」だと評価することは可能であろう。

¹⁶ Gustave Lanson, *Histoire de la littérature française*, Hachette, 1894. 引用はこの著作からではなく、バルザックについての批評文を多数収録した次の書から行なった。Balzac, préface et notices de Stéphane Vachon, Presse de l'Université de Paris-Sorbonne, « Mémoire de la critique », 1999, p. 323-324.

ここでランソンは、バルザックの文学はロマン主義文学の変異体のようなもので、ロマン派的な靈感によって書かれた部分はあるけれども、あまりよくできているとは言えず、注目に値するのはむしろ「平凡あるいは卑俗な魂 (les âmes moyennes ou vulgaires)」を描き出した部分であって、それこそが以後のリアリズム文学誕生の端緒となったと主張している。そしてランソンの言う通り、確かにバルザックにも『ルイ・ランベール (*Louis Lambert*)』や、『谷間の百合 (*Le Lys dans la vallée*)』といった作品があり、そこにはロマン主義小説を一般に特徴づけるところの作者の自我を主題とした内面の分析と告白がある程度見出されるにしても、これらの作品の魅力の中心がそうした記述にあるとはあまり思えないのである。加えて、その原因がランソンの言うようにバルザック自身の「卑俗で、頑丈で、溢れんばかりの性質¹⁷⁾」にあるかどうかはさておき、彼の作品が次々に「平凡あるいは卑俗な魂」を描き出していったことも間違いのない事実である。既に引用した『平役人』と『セザール・ピロトー』の登場人物以外にも、『トゥールの司祭 (*Le Curé de Tours*)』(1832)のピロトー司祭、『老嬢 (*La Vieille Fille*)』(1836)のゴルモン嬢、『ピエレット (*Pierrette*)』(1840)のログロン、『ピエール・グラスー (*Pierre Grassou*)』(1840)のピエール・グラスー、『人生の門出 (*Un début dans la vie*)』(1842)のオスカル、『ラブイユーズ (*La Rabouilleuse*)』(1842)のルージェ、『従妹ベット (*La Cousine Bette*)』(1846)のクルヴェルなどが、そうした性質を付与された登場人物としてすぐさま想起される。このことをふまえると、十九世紀前半の文学状況におけるバルザックの独自性は、「ロマン主義的魂」に相對するところの「平凡あるいは卑俗な魂」の記述に多くの労力を注いだという点に求めることが可能であろう。

ところで「愚かさ」とは、概して知能の次元における平凡さや卑俗さのことではなかろうか。だとすれば、「平凡あるいは卑俗な魂」というのはしばしば「愚かな」精神でもあることになる。だから、もしもランソンの言うとおりにバルザックが「平凡あるいは卑俗な魂」を完璧に描き出した作家なのだとすれば、少なくとも十九世紀前半のフランスにおいては、バルザックこそが「愚かさ」についてもっとも多くを書いた作家の一人であるということになるだろう。そして実際バルザック自身もまた、そうした自分の文学の方向性を意識していたようだ。『老嬢』には次のような一節がある。

それに、愚かさがあるとすれば、天才の不幸を取り上げるように、どうして愚

¹⁷⁾ *Ibid.*, p. 319.

かさの不幸も取り上げないのだろうか。後者は前者とは比較にならぬほど多く存在する社会的要素なのだ¹⁸。

「天才の不幸」というのは孤独者、少数者の不幸であり、それはどちらかというところからロマン主義的なテーマを形成する。バルザックもまた、特異な才能を持つ登場人物の不幸を『知られざる傑作 (*Le Chef-d'œuvre inconnu*)』(1831)、『ルイ・ランペール』(1832)、『ガンバラ (*Gambara*)』(1837)、『マッシミラ・ドーナ (*Massimilla Doni*)』(1839) などにおいて描き出している。しかしながら、『人間喜劇』全体の構成からすると、そうした作品はわずかな一角を占めるにすぎない。周知のようにバルザックは、「戸籍簿と張り合う¹⁹」という言葉が示すように、十九世紀フランス社会の全体の姿を「写し取ろう²⁰」とした。そうだとすれば、現実において数多く存在するもの、少なくともそうバルザックが認知しているものに関して、ある程度まとまった分量の記述がなされるのは自然なことであろう。実際、先ほどタイトルを羅列した作品の登場人物たちにおける社会的地位の多様性は、「愚かさ」がどれだけ社会に広く存在しているかをはっきり示すようなものとなっている。役人(『平役人』)、商人(『セザール・ピロトー』)、司祭(『トゥールの司祭』)、信仰心の篤い老嬢(『老嬢』)、青年(『人生の門出』)、遺産相続人(『ラプイユーズ』)、そして芸術家(『ピエール・グラス』) さえもが、「愚かさ」という巨大な社会的存在の構成部分となっているのである。

以上はほんの粗描でしかないけれども、これによってバルザックがモラリストたちやフロベールに劣らず「愚かさ」について多くを書いた作家であることがおおよそ見て取れたと思う。バルザックが描いたこれらの「愚かさ」は、フロベールのそれとは違って、作家とブルジョワ社会の間に生じつつある深い断絶の感覚を反映したものではない。かといって、モラリストたちにおけるように、オネットオムの陰画として提示されるのでもない。バルザックにとって「愚かさ」とは、人間社会全体を表現しようとするならば不可避免的に見いだされるテーマなのであって、彼はそこに多くの文学的可能性を見出し、それを『人間喜劇』において開花させたのである。

しかしながら、もしも『人間喜劇』がモラリストの手法とフロベールの手法を折衷したような表現形式によって書かれた「愚かさ」の社会的ヴァリエーションの見本帳でしかなかったとしたなら、たとえその数が膨大であろう

¹⁸ *La Vieille Fille*, CH, t. IV, p. 863.

¹⁹ *Avant-propos*, CH, t. I, p. 10.

²⁰ *Ibid.*, p. 14.

ともわれわれの興味を引くには十分でなかったであろう。バルザックの独自性は一体いかなる点にあるのだろうか。以下において本稿の見解を述べることにしたい。

不可避の運命としての「愚かさ」

ジェラルール・ジュネットが明らかにしたように、バルザックの思考法における特徴の一つは因果関係の重視である²¹。それは時として小説技法上の必要から濫用され、同じ現象が正反対の原因によって説明されるといった混乱も引き起こす。しかし、だからといってバルザックによって提示される因果関係のすべてが恣意的なわけではない。その思想の基底部分には当然ながら確固とした恒常性が認められるのであり、たとえば「愚かさ」はいったいなぜ生じるのか、その原因は何かという問いに対するバルザックの説明は、常に一定なのである。一言で言うならば、生まれつきの素質と育った社会的環境（とりわけ職業）、この二つがあらゆる恒常的な「愚かさ」の原因とされるのだ²²。

『ゴリオ爺さん』（1835）の主人公などはまさにその典型であろう。ゴリオは、他の登場人物、語り手、そして最後にはゴリオ自身によってさえも、繰り返し愚かであると形容されているが、その「愚かさ」は決して、二人の娘に対するあの異常なまでの愛に由来するものではない。この作品と同時期に書かれていた『セザール・ピロトー』の主人公ピロトーの場合ほど強調されてはいないけれども²³、ゴリオの能力には生まれつきの限界が定められているのであって、またとりわけ製麺業という職業の実践によって「知性」を使い果たした結果、愚かになったのだと説明されるのである。

ごく限られた能力しか持たない人たちすべてに起こるようなことが、彼にも起こった。凡庸さが彼を救ったのである。[...] 穀物の商売が彼の全知能を使い果

²¹ Gérard Genette, *Figures II*, Seuil, 1969, p. 79-86.

²² 情熱によって生じる一時的な「愚かさ」については、本稿では扱わない。もちろん『人間喜劇』に多くの例はある。ミシェル・アダンは、『カディニャン公妃の秘密 (*Les Secrets de la princesse de Cadignan*)』を挙げている。Michel Adam, *op. cit.*, p. 142.

²³ 「セザール・ピロトーとはこうした人間だった。尊敬に値する人物なのだが、人の誕生を支配する神祕が彼に政治および人生の全体像を判断する能力、あらゆることで型どおりのやり方にしがたう中流階級のとどまっている社会的水準を超えるための能力を授けてくれなかったのである。中流階級の意見はすべて彼に伝えられ、彼は吟味せずそれらすべてを実行した。」 *César Birotteau*, *CH*, t. VI, p. 80.

たしてしまったかのようにだった。小麦や小麦粉や飼料用穀物に関し、その品質や産地を見分け、保存に気をつけ、相場を予想し、豊作か不作かを予言し、穀物を安く手に入れ、それをシチリアやウクライナから仕入れることにかけては、ゴリオの右に出る者はなかった。[...] それがいってん専門の商売から離れて、質素な薄暗い店の戸口に出て、肩をドアの縦枠にもたせかけ、暇な時間にじっとしているときには、彼は愚鈍で粗野な労働者に逆戻りし、理屈ひとつ理解することもできない、精神のあらゆる快樂に無感覚で、芝居を見に行っても居眠りするような、パリのドリバン²⁴の一人、愚かさだけが取り柄といった男になってしまうのであった。こうした精神の人間はみなほとんどそっくりである。すなわち、彼らにはたいてい、心の中に崇高な感情が見出せるのだ。たった二つの感情だけが製麺業者の心を満たし、その潤いを吸い尽くしてしまったのだが、それは穀物の商売が彼の脳みその知能すべてを使ってしまったのとちょうど同じであった²⁵。

要するに、もともと「ごく限られた能力」しか持っていなかった上に、商売によって「全知能」を使い果たしてしまったせいで、ゴリオは「愚かさだけが取り柄」の男になってしまったというわけである。「二つの感情」というのは、妻に対する愛と、妻の死後における二人の娘に対する愛を指すが、こちらは「心」にしか関わっていない。ゴリオが愚かであることと、彼が二人の娘を異常なほど溺愛したこととの間には直接の関係はないのである。このことは、『ゴリオ爺さん』に先行して書かれた『ヴェンデッタ (*La Vendetta*)』(1830)のピオンボヤ『フェラギュス (*Ferragus*)』(1833)のフェラギュスが、同じく娘を溺愛する父の系列にありながら、決してゴリオのように愚かではないことによっても傍証を得るであろう²⁶。思うにゴリオは、娘を溺愛する父という基本のキャラクター設定に、「愚かさ」という要素を加えることによって創造された登場人物なのではなからうか。

いずれにせよ、われわれにとって重要なのは、ゴリオの「愚かさ」が人間的、社会的にほとんど不可避な運命として設定されているという事実である。われわれは以前に、バルザックの人間観の中心には、「知能」の器官決定説、すなわち人間の「知能」の高低は「脳」を中心とする「人体器官の完成度²⁷」によって、生まれながらに決定されているという考えが認められることを示

²⁴ シュダール・デフォルジュ (Choudard-Desforges) の喜劇『耳の不自由な人、あるいは満員の宿屋 (*Le Sourd ou l'Auberge pleine*)』(1790)の主人公。

²⁵ *Le Père Goriot*, CH, t. III, p. 123-124.

²⁶ ゴリオへと連なる登場人物の系譜については、Pierre Barbéris, *Le Père Goriot de Balzac : écriture, structures, significations*, Larousse, 1972, p. 41-45. を参照。

²⁷ *Louis Lambert*, CH, t. XI, p. 685.

した²⁸。つまりそれにしたがえば、ゴリオが愚かなのはそう生まれついたからなのであって仕方のないことなのだ。

そしてまた、商売によって「知能」をすり減らしてしまったという設定はどうだろうか。これについても、人間が生きるということは社会においてなんらかの役割を果たすということであって、その結果、自分の仕事に無関係なことについては頭が鈍くなるのが宿命である、という考え方がその根底にあるのだとすれば、不条理とまでは言えないだろう。少なくとも、モーリス・バルデーシュがそのまま『ゴリオ爺さん』のプロローグになると評した²⁹『金色の眼の娘』(1835)の冒頭、パリの相貌を描いた箇所においては、社会生活とはまさに人間の頭脳を酷使し、衰弱させてしまうものとして描き出されている。

労働者はその萎縮の最終段階に到達したとき療養院で死ぬが、それに対して中産階級の人間は生に固執し、白痴になって (crétinisé) 生きていく。

大商人も裁判官も弁護士もまともな感覚を保ってられない。彼らはもはや何も感じず、金銭によってゆがめられた規範を適用する。彼らは奔流のような生活に押し流されて、もはや夫でも父でも恋人でもなくなる。人生の雑事の上を木ぞりで滑りおり、大都会のビジネスにたえず駆り立てられて生きていく。[...] 注意深い観察者ならそこに思考の退化 (l'abâtardissement de la pensée) の兆候を認めるだろう。また頭脳の創造的能力 (les facultés génératives du cerveau) や、物事を大局においてとらえて、一般化し、演繹する天賦の才を殺してしまう専門業の曲芸場の中で、かれらの思考がぐるぐる回るのを見るであろう。

こうした空虚な生活、決して訪れない快楽に対する絶えざる期待、永遠の倦怠、精神と心と知的能力の欠如、パリの大夜会の疲労が、金持ちたちの顔つきには表れて、あの張り子の顔、あの早すぎる臆、そして無気力にゆがみ、黄金が反射し、知性が逃げ去った (d'où l'intelligence a fui) あの表情を作り上げるのだ³⁰。

すなわち、「機械的な知性 (intelligence mécanique³¹)」しか持たないとされる肉体労働者は別としても、プチ・ブルジョワとブルジョワはその職業の実践によって、また労働の必要のない富裕層は遊蕩生活によって、それぞれ知

²⁸ 拙稿「近代社会における「知能」—バルザックの場合」、『仏語仏文学研究』第27号、東京大学仏語仏文学研究会、2003年、p. 87-106。

²⁹ Maurice Bardèche, *Balzac romancier*, 1943, p. 336.

³⁰ *La Fille aux yeux d'or*, CH, t. V, p. 1045, 1047-1048, 1051.

³¹ *Ibid.*, p. 1042.

的能力を退化させてしまうというのである。社会生活は一般に人間を愚かにする、というのがここから見て取れるバルザックの考えであろう。

ちなみに、パリのような都会から離れば、そうした退化から逃れられるかというところもそういってもない。バルザックにおいて地方は、刺激が少ないせいで逆に知性が眠り込んでしまうような場としてしばしばとらえられており、さらには（ほとんど差別的言辭といわざるを得ないが）もともと知性ある人間に恵まれない土地であると考えられている³²。結局のところ、バルザックの人間観と社会観からすれば、社会に生きる人間の大部分は何らかの意味において愚かなのであって、パリであろうと地方であろうと、「愚かさ」を不可避の運命として生きていることになる。

このように、「愚かさ」がある種の宿命論によって説明されることの意味はきわめて大きい。なぜなら、それによって「愚かさ」に関する判断の基準がまったく変わってしまうからである。「愚かさ」が人間にとって避けられないものとしたら、それを軽蔑したり、憎んだりすることにはたしてどれだけの意味があるだろうか。人間の力によって避けられないものに対して道徳的判断をくだしたり、感情的になったりするのとは、それこそ愚かな振舞いということになるのではなかろうか。『ゴリオ爺さん』の発表当時、ある批評家は「純粋に本能的な感情、いかなる理性の光によっても照らされることのない感情によって誇張された典型的人物」と評して、いわばゴリオのあまりにひどい「愚かさ」に腹を立てたのであるが³³、そのような苛立ちはバルザックには無縁のものであった。

それどころか、「愚かさ」の背後に生まれつきの素質と社会的環境という二つの原因を見出したバルザックは、「愚かさ」という表面上の現象を収集してそのヴァリエーションを描き出す一方で、その原因である素質や職業によって、その運命を大きく左右される人類に対して、ある種の憐憫の情を覚えていたように思われる。バルザックにとって「愚かさ」の問題とは、『老嬢』にあったようにまず「愚かさの不幸」の問題なのであり、できることならその解決の道を示すべき問題なのである³⁴。

³² 「誰も種族を交配させようと考えないので、必然的に精神は退化する。こうして多くの地方都市では、血が悪くなっているのと同じほどに、知性が稀になっている。」 *La Muse du département*, CH, t. IV, p. 652.

³³ *Le Constitutionnel*, 13 avril 1835. の記事。引用は次の書から行なった。Jeannine Guichardet, *Le Père Goriot d'Honoré de Balzac*, Gallimard, « Foliothèque », 1993, p. 107.

³⁴ もちろんゴリオの不幸の最大の原因は、愛する娘たちの忘恩や婿たちの冷酷に求められる。しかしながら、結婚相手をもう少し慎重に選ぶことはできたし、財産分与の

それでは、生まれつきの素質に恵まれない人間、社会的環境によって疲れた人間にいかなる救いの道があるというのだろうか。われわれはこの問いに対するバルザックの解答が、以下に検討する『現代史の裏面』にあると考える。

生まれつきの素質と社会的環境のもたらす不幸の救済

「美德と、宗教と、慈善の活動が大都会の腐敗の中心に見られるような作品³⁵」、バルザックは『娼婦の栄光と悲惨』の序文において、その当時まだ未完成だった『現代史の裏面』(1848)に言及してこう評している。実際、はなばなしい人生を歩もうとして失敗した三十歳ほどの主人公ゴドフロワが、「慰めの兄弟の会 (l'Ordre des Frères de la Consolation)」という団体に入って慈善の道に生きることを決意するまでを描くこの作品は、『田舎医者 (*Le Médecin de campagne*)』(1833)、『村の司祭 (*Le Curé de village*)』(1839)といった『人間喜劇』における理想主義的な作品群の最後に位置し、キリスト教の愛の力による傷ついた魂の救済をその基本的なテーマとしている³⁶。

したがって、作品解釈において当然問題になるのは、いったいどのような原因によって登場人物たちが不幸に陥ったと設定されているのか、という見きわめであろう。言うまでもなく、『現代史の裏面』において最も際立っているのは政治的な原因である。「慰めの兄弟の会」を主宰するラ・シャントリー夫人の最大の不幸は、反革命運動に巻き込まれた娘を断頭台の上で失ったことにあるからだ。また、この娘に死刑を求刑した検事が王政復古、七月革命を経て没落し、変名を使って貧窮生活を送っていたところに「慰めの兄弟の会」が救いの手を伸ばし、最終的にラ・シャントリー夫人が過去の一件について赦しを与えるという物語の筋からしても、政変によって不幸に陥った人々を互いに和解させ、分断されたフランスの一つに復元した姿を描いてみ

時期を遅らせることもできたはずである。少なくとも、娘のデルフィーヌと瀕死のゴリオ本人はそう考えている。「わたしたちが結婚するときには、分別なんてほとんどありません。わたしたちに世間や商売、男性や習俗なんかが分かるでしょうか。父親が娘のために考えてくれなければならなかったのですわ。」「わしが正しい身の処し方を知らなかったのだ。自分の権利を自ら放棄するという愚を演じたのだから。」*Le Père Goriot*, CH, t. III, p. 244, 276.

³⁵ *Splendeurs et misères des courtisanes*, CH, t. VI, p. 426.

³⁶ バルザックの宗教観については、Philippe Bertault, *Balzac et la religion*, Genève, Slatkine Reprints, 1980. (初版1942年)を参照。

たいというバルザックの欲求が見て取れる。その限りにおいて、『現代史の裏面』は政治的な傷の、キリスト教的な愛による救済を主題とした作品であると言って差しつかえないだろう。

しかしながら、作品の細部をよく読んでみると、生まれつきの素質や社会的環境に由来する不幸も問題となっているのにわれわれは気づく。まず第一に、主人公ゴドフロワの不幸がそうである。その半生の記述には次のような指摘がある。

彼は出世しようと努めたが、あらゆる努力が彼の無力を証明することになるのだった。自分の欲望と境遇 (fortune) の間の不釣り合いにようやく気づくと、社会において支配的地位にある者たちが憎らしくなった。彼は自由主義者になり、本を一冊書いて名声を獲得しようと企てた。しかし、「才能 (Talent)」を「貴族」を見るのと同じ目で見なければならぬことを、苦い経験とともに学んだだけであった³⁷。

成功した小売商の息子であるゴドフロワは、親の希望にしたがってパリの公証人となるべく法律の勉強をさせられるのだが、彼はそうした地味な目標に満足することができない。それで自分にあると信じた才能を頼みに成りあがろうとするのだが失敗し、結局自分がごく平凡な人間であることを思い知らされる。ここでゴドフロワが生まれつきの素質に恵まれない存在として設定されていることは明らかだろう。「運命」とも訳せる« fortune »のめぐり合わせによって、彼は出生による特権である「貴族」と同じように、「才能」からも見放されているというのだから。

その後、ゴドフロワにおける能力の乏しさは彼の母親の目にも明らかなものとなり、親子は田舎に住む財産家の一人娘との結婚という平凡な幸福に狙いを定めるのだが、ゴドフロワはこれにも失敗し、母親が死んだ後、将来に対する何の展望もなく、また何の能力も自分のうちに感じられないという哀れむべき状態に陥る。

現実を相手に戦うほどの器用さもなく、優れた能力をいくらか持っているとは思いうけれども、それを行動にうつすだけの意志はなく、自分には何か足りないと感じるのだが、何か大きなことをやってみるだけの力もない³⁸。

ゴドフロワの不幸は、自らの能力の凡庸さに気づかずに、身分不相応な社

³⁷ *L'Envers de l'histoire contemporaine*, CH, t. VIII, p. 220.

³⁸ *Ibid.*, p. 223.

会的成功を目指して失敗したことに由来する。すなわち、近代的な競争社会においては必然的に生み出される種類の不幸をゴドフロワは体現しているわけで、自ら招いた災難とはいえ同情の余地はあるだろう。ゴドフロワが「フランスが「平等」と呼ぶところのものの犠牲者³⁹」と形容される所以である。

一方、実社会にしっかりと組み込まれてはいるが、『金色の眼の娘』の冒頭に描かれていたような過酷な環境の中であくせく働き、その結果無意味に過ぎ去った自分の人生に愕然とするという種類の不幸も『現代史の裏面』の中に描かれている。それが、「慰めの兄弟の会」の一員であるところのアランの不幸である。「パリのプチ・ブルジョワ⁴⁰」の風貌をしたアランは、もともとあった財産を、(ずっと後で何十倍にもなって返ってくるとはいえ) 昔の親友に気前よく貸すという「へま⁴¹」をやったり、投資に失敗したりしたせいで、ほとんど失くしてしまい、その結果細々とした仕事で生計を立てることになったとされるのだが、ある程度の経済的余裕を取り戻した時に、自らの半生を振り返ってこう述べている。

私はその時五十歳で、人生はほとんど終わっていました。「おれは何の役に立つのだろう。誰に財産を残してやろうか。アバルトマンに豪華な家具を入れたら、いい料理女を雇ったら、自分の生活がしっかりと安定したら、何に自分の時間を使ったらいいだろう。」私は自問しました。そういうわけで、革命の十一年と貧窮の十五年が、人生の一番楽しい時間を食いつぶし、不毛な仕事(travail stérile)ですり減らし、あるいはそれをただ私一個人の露命をつなぐためだけに使い果たしてしまったのです⁴²。

アランが「不毛な仕事」と呼ぶのは、質屋勤め、筆耕、簿記といったものである。これは、『金色の眼の娘』の表現を使うとするならば、その繰り返しによって誰もが「白痴になって (crétinisé)」しまうような中産階級の仕事に相当する。もちろん、ここではそのような誇張的な表現は避けられているが、アランが職業という社会的環境によって不幸に陥ってしまう人々の一人として造型されていることは間違いない。

したがって、ゴドフロワとアランの二人は、それぞれ生まれつきの素質と社会的環境のもたらす不幸を体現しているわけであるが、はたして彼らがそれまでの半生を捨て去ってその会員になるところの慈善団体「慰めの兄弟の

³⁹ *Ibid.*, p. 219.

⁴⁰ *Ibid.*, p. 241.

⁴¹ *Ibid.*, p. 265.

⁴² *Ibid.*, p. 274.

会」は、どのような力によってかれらの不幸を宥めたのであろうか。もちろん、キリスト教の愛の力と言ってしまえばそれまでであるが、バルザックの解答はもう少し世俗的なもの、つまり宗教的信仰心がなくても実現しうるものとなっているようにわれわれには思われる。この点について、以下に検討したい。

共同体の再構築

上記においてわれわれは、生まれつきの素質と社会的環境こそが「愚かさ」の原因であるとするバルザックの思想を明らかにした上で、そうした観点からすると「愚かさ」へと運命づけられているというほかないゴドフロワとアランという二人の登場人物が、慈善活動を新しい人生の仕事とすることによって救われるという理想主義的作品、『現代史の裏面』の筋書きを紹介した。

それでは、繰り返しになるが、慈善活動および作品中でその活動主体となっている「慰めの兄弟の会」は、具体的にはどのような力によってゴドフロワとアランをひきつけ、彼らを幸福な存在へと変えたのであろうか。

もちろん、バルザックが公言する意図からすれば、すべてをキリスト教の精神的な力によって説明するのが理想であろう。実際、「慰めの兄弟の会」においては『キリストにならいて (*Imitation de Jésus-Christ*)』が日課のようにして読まれており、僧院のような精神的雰囲気の中で規則正しく行なわれる静かな生活自体が幸福の源泉となっている⁴³。

しかしながら、まずゴドフロワの場合について考えるならば、彼が自分自身に感じている無力感を払拭することこそが、彼にとっての最大の恵みとなるのでないかと考えられる。少なくとも以下に引用する一節からすると、そう判断できるだろう。

ゴドフロワは街を歩きながら、自分がまったく別人になったような気がするのだった。もしも誰かその内面を見通すことができたとしたら、集団の力の感化という奇妙な現象に感心したことだろう。それはもはや一人の男ではなくて、自分が五人の代表者だと知っている十人力もの存在だった。その五人が力を合

⁴³ 「そんなふうにして数日が過ぎた。そのあいだゴドフロワは、どの時間にも使い道が決まっている生活の魅力を感じた。一定の時間に、あらかじめそれと承知している仕事に戻ってくること、その規則正しさが多くの幸福な生活を説明するが、これは修道会の創設者たちが、どれだけ深く人間の性質について熟慮したかを証明するものだ。」 *Ibid.*, p. 255.

わせて彼の行動を支え、彼といっしょに歩いているのだった。そうした力を心に抱いた彼は、生命力の充実を覚え、自分をふるいたたせる気高い力を感じるのであった⁴⁴。

これはゴドフロワが「慰めの兄弟の会」の一員として初めて仕事に出かけるときの心象を説明したもののだが、彼があればほどまでに苦しんだ個人的能力の不足という問題が、集団の一員となることによって解決されてしまっていることが注目される。考えてみれば、生まれつきの素質の不足が大きな問題となるのは、互いを競争相手とみなすような個人の集まりによって社会が構成されていると考える場合であって、もしもそうした個人主義をなんらかの形で和らげることができれば、さほど心配することでもないのかもしれない。

それでは、アランに注目した場合には、幸福へのどのような道筋が見えてくるのであろうか。注意すべきことは、アランが「慰めの兄弟の会」に加入する以前から一人で慈善活動を始めていたことである。アランは先ほどの告白に続けて、慈善活動のもたらす喜びについてこう説明している。

この年齢になっては人間誰しも、貧窮に締めつけられた無名の運命から華々しい運命へと飛躍することはできません。しかしながら、自分を有用なものとすることはいつでもできます。私にもやっと、助言を惜しまず監督すれば、与えた金の価値は十倍にもなるのだということが分かりました。というのも、不幸な人たちはとりわけ指導者を必要としているからです。[...] いくつか立派な結果が得られたので、私は鼻高々でした。摂理の役目を小さく演じる楽しみから得られる甘美な喜びは別としても、私はここに目的と仕事 (occupation) とを一度に見つけたのでした⁴⁵。

アランはここで、自分の生活の必要を満たすための仕事と、不幸な人たちに助ける仕事をまったく別のものであるととらえ、後者だけが「喜び」と「目的」を与えてくれたのだと示唆している。なぜこのような違いが生じるのか。忘れてはならないことは、実際にこなす仕事の内容は必ずしも大きく変わるわけではないという点である。たとえば、ゴドフロワが「慰めの兄弟の会」に入るにあたって喜びとともに始めたのは簿記の勉強なのであるが、アランが「不毛な仕事」と呼んだのもこの同じ簿記であった⁴⁶。だから問題は、ア

⁴⁴ *Ibid.*, p. 329.

⁴⁵ *Ibid.*, p. 274.

⁴⁶ 『『簿記をお習いなさい [...]』』『そうですか！それはもう喜んで』とゴドフロワは叫んだ。』*Ibid.*, p. 251.

ランが自分の生活を満たすための仕事において、「自分を有用なもの」であると感じられなかったことにある。言い換えれば、アランが以前に送っていたのは自己が目的であるような生活であり、慈善活動によって開始されたのは自己が手段でしかないような生活なのである。

もちろん、ここで金銭の問題に触れないわけにはいかないだろう。金銭を得るための仕事と、金銭を使う一方の仕事では明らかに仕事の種類が違うからである。アランが仕事、活動 (occupation) と呼んでいるものは、それによって金銭が消費される以上、むしろ娯楽の部類に入る活動なのかもしれない。しかしながら、ここで思い出されるべきは、『金色の眼の娘』の冒頭に描かれたパリの相貌において、「金と快樂⁴⁷」がどちらも人を消耗させるものとして描かれていたことである。金がなければ金を稼ぐことに疲れ果て、金があれば快樂の追求に疲れ果てる、というのがバルザックの見た近代社会の病であった。その限りにおいて、慈善活動をするアランの楽しみが金銭を使うことにあるのだと考えるのは難しい。アランの幸福の源泉にあるのは、いつの間にか陥っていたエゴイズムから抜け出して他者との連帯の感覚を取り戻した点にあるというべきなのだ。

こうして考えてみると、慈善活動と「慰めの兄弟の会」がアランに与えたものは、ゴドフロワの場合と同じく共同体の感覚ということになるだろう。ゴドフロワは共同体の一員になることで、生まれつきの素質の弱さをカバーすることができ、またアランは自己保存に必要な金銭の獲得だけを目的とするような職業への従事によって生じた徒労感を、自分の同類に対する奉仕の実践によって払拭することができたのだから。共同体の感覚を取り戻すことで誰もが自らの弱さや消耗に由来する不幸を癒すことができる、これが『現代史の裏面』から読み取れるバルザックのメッセージなのである。

結論

「愚かさ」に関するバルザックの考察の特徴は、「愚かさ」を生み出す人間的、社会的原因を突き止めようとする思考の方向性にある。ところでその思考の先に見出されたのは、人間の能力にはそれぞれ限界があるという決定論と、人々を金銭や快樂の追求へ駆り立てるように見える近代社会の構造であった。このような見地からすると、「愚かさ」はもはや単なる風刺的描写の対

⁴⁷ *La Fille aux yeux d'or*, CH, t. V, p. 1049.

象ではなくなってくる。それは、ほとんど不可避の社会的存在なのであって、むしろなんらかの形で救済すべき事柄なのである。この点につき、『ゴリオ爺さん』と『現代史の裏面』は、意味の次元において反転した双子の作品であろう。すなわち、『ゴリオ爺さん』は生まれもった能力の低さ、あるいはその消耗が「愚かさ」を生じせしめ、それが悲劇的な不幸へと直結してしまうというリアリズムの作品であるのに対して、『現代史の裏面』は能力の不足やその消耗によって生じた不幸が、共同体感覚の再建によって癒され、そこではもはや「愚かさ」が問題にならなくなってしまうような理想主義の作品なのである。

もちろん、『現代史の裏面』の提出する解決策は、なんらの実現性も帯びていないから無意味であると主張することも不可能ではない。しかしながら、すぐに「愚かさ」に落ち込んでしまうような弱い個人を連帯させ、それによって全体の福祉の増大を図るという方向性は、二十世紀以降の歴史において多くの社会が選択したものであったことも事実である。しかもその試みはかなりの程度成功し、徐々に大衆社会が成立するのであるが、それは一部のエリート層にとっては苛立ちの対象とさえなるほどであった。その理由はおそらく、幸福を勝ちとった人々あるいは幸福を権利として主張する人々が、自らの元来の弱さを忘れてしまっていて傲慢にふるまっていると感じられたからであろう。しかし、そのような大衆社会の繁栄は決して永遠に保証されたものとしてあるわけではない。十九世紀初頭という近代社会の始まりの段階でバルザックが主張した弱い個人の連帯の必要性は決して現在でも失われていないし、今後も重要な課題であり続けるだろう。

バルザックにおける「愚かさ」の問題について、本稿では理想主義的作品における「愚かさ」の救済という側面に注目して論じたわけであるが、この問題について研究すべきことはまだ多く残っている。少なくとも、本稿では論の展開上単純化してしまったが、バルザックにおける「愚かさ」の観念がどのような広がりを見せているか、その多様性の相において考察を深める必要があるだろう。これについては今後の課題としたい。